

問題8

正解

4

難易度

A

【出題内容】

標準原価計算に関する正誤問題

【解 説】

ア. 正しい。 通常、価格差異には数量差異の影響（混合差異）が含まれている。 *p179*

イ. 正しい。 （基準44） *p178*

ウ. 誤 り。 材料受入価格差異は、標準受入価格と実際受入価格との差異に、実際購入数量を乗じて算定する。（基準46(1)） *p30, 184*

エ. 誤 り。 操業度差異が標準操業度と基準操業度の差に基づく場合、その能率差異は変動費のみからなり、また操業度差異が実際操業度と基準操業度との差に基づく場合、その能率差異は変動費と固定費からなる。 *p180* *本問の記述は逆。*

オ. 正しい。 （基準4(1)2） *p168*

以上より、正しくないものはウ、エであり、正解は4となる。

問題9

正解

5

難易度

B

【出題内容】

標準原価計算 (修正パーシャル・プラン)

【解説】

製造間接費の当月製造原価については、「標準配賦率に実際配賦基準値を乗じた金額」で記入する方法と「実際発生額」で記入する方法があるが、本問では指示がないため両方計算する必要がある。ただし、選択肢のうち両方で計算が異なるのは、原価差異(エ)と仕掛品勘定の合計(オ)であるため、その点のみに着目して効率的に解いてほしい。

1. 生産・標準原価データの整理 (カッコ内は、加工費の完成品換算量を示す)

	仕掛品		
*1) 17,982,000円(ア)	月初 1,200個 (540個)	完成 3,000個	*6) 70,200,000円(ウ)
直接材料費*2) 19,507,500円	当月 2,400個		
直接労務費*3) 27,610,000円(イ)	(2,760個)	月末 600個	*7) 9,450,000円
製造間接費*4) 15,060,000円 or		(300個)	
*5) 15,100,000円			

- *1) 1個当たり標準直接材料費8,100円×月初仕掛品量1,200個
+ 1個当たり標準加工費*8) 15,300円×月初仕掛品完成品換算量540個
- *2) 標準価格1,350円×実際消費量14,450kg
- *3) 標準賃率1,100円×実際作業時間25,100時間
- *4) 標準配賦率600円×実際作業時間25,100時間
- *5) 実際発生額
- *6) 原価標準23,400円×完成品量3,000個
- *7) 1個当たり標準直接材料費8,100円×月末仕掛品量600個
+ 1個当たり標準加工費*8) 15,300円×月末仕掛品完成品換算量300個
- *8) 1個当たり標準直接労務費9,900円+ 1個当たり標準製造間接費5,400円

2. 勘定記入

(1) 製造間接費を「標準配賦率に実際配賦基準値を乗じた金額」で記入する方法

材 料		仕 掛 品	
諸 口	仕 掛 品	前 月 繰 越	製 品
20,808,000	(19,507,500)	(ア : 17,982,000)	(ウ : 70,200,000)
	原 価 差 異	材 料	原 価 差 異
	1,300,500	(19,507,500)	(エ : *, 509,500)
		賃 金	次 月 繰 越
		(イ : 27,610,000)	(9,450,000)
賃 金	仕 掛 品	製造間接費	
諸 口	(27,610,000)	(15,060,000)	
25,602,000		原 価 差 異	
原 価 差 異		(0)	
2,008,000		(オ : 80,159,500)	(80,159,500)
	製造間接費		
諸 口	仕 掛 品		
15,100,000	(15,060,000)		
	原 価 差 異		
	40,000		

*) 貸借差額

(2) 製造間接費を「実際発生額」で記入する方法

材 料		仕 掛 品	
諸 口	仕 掛 品	前 月 繰 越	製 品
20,808,000	(19,507,500)	(ア : 17,982,000)	(ウ : 70,200,000)
	原 価 差 異	材 料	原 価 差 異
	1,300,500	(19,507,500)	(エ : *, 549,500)
		賃 金	次 月 繰 越
		(イ : 27,610,000)	(9,450,000)
賃 金	仕 掛 品	製造間接費	
諸 口	(27,610,000)	(15,100,000)	
25,602,000		原 価 差 異	
原 価 差 異		(0)	
2,008,000		(オ : 80,199,500)	(80,199,500)
	製造間接費		
諸 口	仕 掛 品		
15,100,000	(15,100,000)		

*) 貸借差額

選択肢にある数値のうち、「5. 80,199,500」が、(2)製造間接費を実際発生額で記入する方法の、(オ)の数値と一致する。

以上より、正解は5となる。

問題 9

正解

1

難易度

A

【出題内容】

標準原価計算に関する穴埋め問題（原価標準）

p9, 168~169

【解 説】

空欄（ a ）～（ f ）を埋めれば、以下のようになる。

- ア．原価標準とは製品単位当たりの標準原価であり、標準原価は原価標準に（ a : ⑥**実際生産量**）を乗じて算出される。
- イ．原価標準は、原則として（ b : ④**物量標準**）と（ c : ⑤**価格標準**）との両面を考慮して算定する。
日本企業においては、原単位の観点から（ b : ④**物量標準**）がとくに重視され、その管理に力が注がれてきた。
- ウ．原価標準は、財貨の消費量を（ * : ⑩**科学的**）, 統計的調査に基づいて能率の尺度となるように予定し、かつ、（ d : ②**予定価格**）又は正常価格をもって計算した原価をいう。この場合能率の尺度としての標準とは、その標準が適用される期間において達成されるべき原価の目標を意味する。
- エ．予定の仕方が（ * : ⑩**科学的**）であるか否かによって、原価標準は（ e : ⑬**原価見積**）と区別される。
- オ．原価標準のタイプには、（ f : ⑮**理想標準原価**）, 正常原価, 現実的標準原価がある。（ f : ⑮**理想標準原価**）とは、技術的に達成可能な最大操業度のもとにおいて、最高能率を表す最低の原価をいい、財貨の消費における減損、仕損、遊休時間等に対する余裕率を許容しない原価である。

以上より、正解は1となる。

「上記文章を読んで終わり」というような復習ではなく、
p9, 168~169を何度も読み込むような復習をしてほしい。

問題 8

正解

3

難易度

A

【出題内容】

理論 (正誤) 標準原価計算

【解説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

- ア. 誤り。 能率の尺度として考えていた標準原価はおおむね理想標準原価であった。 P169
- イ. 正しい。 P186
- ウ. 正しい。 (基準47(2)1) P182
- エ. 誤り。 シングル・プラン (インプット法) では、労働時間差異について、作業時間報告書上に、①標準作業時間、②実際作業時間、③差異、④差異の発生原因などを日々記録する。 P176

以上より、正しいものはイ、ウであり、正解は3となる。

標準原価差異を
速やかに把握 (P176)。

作業現場で作成

↓

仕×品 a/c の話

↓

110-シヤシ・フロンでは、
「標準作業時間」は、
作業現場では意識しない。
(実際作業時間のみ意識)
P173 ALR × ALH

問題 9

正解

5

難易度

C

【出題内容】

計算 標準原価計算（仕損および減損の発生と標準原価計算）

【解 説】

原価標準の設定は、いわゆる第2法（仕損の余裕分を独立の項目とする方法）によっているが、選択肢より、仕損許容量超過分を異常仕損費ではなく、標準原価差異の一部（仕損差異）として把握する必要がある。見慣れない問題であるため、後回しにして欲しかった。

1. 生産データの整理

(1) 仕損許容量および超過分の把握

① 仕損許容量

完成品480個×仕損許容量率5%=24個

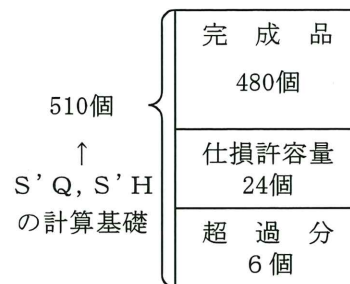
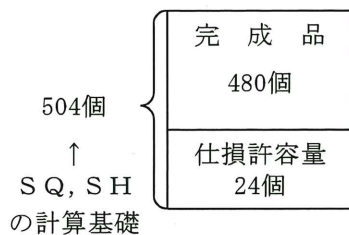
② 超過分

仕損品 30個－仕損許容量24個＝6個

(2) 標準原価差異（数量面の差異）の計算基礎

仕損許容量超過分を「仕損差異」という形で把握する場合、仕損許容量超過分の標準原価はすべて標準原価差異（数量面の差異）の一部として把握されることになる。

具体的には、標準消費量(SQ)と標準作業時間(SH)は、仕損許容量超過分を無視した生産データを基礎として計算する。他方、仕損差異を分離把握するための消費量(S'Q)と作業時間(S'H)は、仕損許容量超過分を考慮した生産データを基礎として計算する。



2. 直接材料費差異（合計：－62,500円）

なお、有利差異は＋，不利差異は－で示す（以下同様）。

S P 1,500円	材料価格差異 +132,500円		A C 3,842,500円	
	仕損差異 -45,000円		材料数量差異 -150,000円	
	S Q 2,520kg 504個×5kg	S'Q 2,550kg 510個×5kg	A Q 2,650kg	

問題 9

正解

5

難易度

A

P204~205

【出題内容】

計算 標準原価計算（仕損・減損の発生と標準原価計算）

【解説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

1. 生産データの把握（カッコ内は加工費完成品換算量）

仕掛品

月初	300kg (180kg)	完成	2,500kg (2,500kg)
当月	2,700kg (2,740kg)	正損	*1) 75kg (75kg)
		異損	*2) 25kg (25kg)
		月末	400kg (320kg)

*1) 完成品2,500kg×正常減損率3%

*2) 減損100kg－正常減損75kg

2. 勘定記入

仕掛品

前月繰越 (ア: *1) 6,300,000円)	製 品 (イ: *3) 79,310,000円)
直接材料費 (17,144,960円)	異常減損費 (ウ: *4) 770,000円)
直接労務費 (31,795,800円)	直接材料費差異 (エ: *5) 134,960円)
製造間接費 (38,060,400円)	直接労務費差異 (オ: *6) 1,107,800円)
	製造間接費差異 (カ: *7) 1,618,400円)
	次月繰越 (10,360,000円)
(93,301,160円)	(93,301,160円)

*1) @標準直材費6,300円×月初300kg+@標準加工費*2) 24,500円×月初加工量180kg

*2) @標準直労費11,200円+@標準製間費13,300円

*3) 1kg当たり総標準原価31,724円×完成品2,500kg

*4) 1kg当たり正味標準原価30,800円×異常減損25kg

*5) 「不利差異が正の値となるように算式を示す（以下同様）。」

実際直材費17,144,960円－標準(@標準直材費6,300円×当月2,700kg)

*6) 実際直労費31,795,800円－標準(@標準直労費11,200円×当月加工量2,740kg)

*7) 実際製間費38,060,400円－標準(@標準製間費13,300円×当月加工量2,740kg)

問題 7

正解

4

難易度

A

【出題内容】

計算 標準原価計算（仕損・減損の発生と標準原価計算，勘定記入）

【解 説】

特殊な修正パーシャル・プランではあるが，消去法を用いて確実に正答して欲しかった。

1. 生産データの把握（カッコ内は加工費完成品換算量）

仕 掛 品	
月初 500個 (250個)	完成 3,500個 (3,500個)
当月 4,000個 (3,850個)	正損 *1) 140個 (140個)
	異損 *2) 60個 (60個)
	月末 800個 (400個)

完3,500コ - 首0コ + 末0コ = 3,500コ

*1) 完成品3,500個×正常仕損率4%

*2) 仕損200個－正常仕損140個

2. 勘定記入 ← 必ず把握!!

p184~185

問題文の指示に「直接材料についてのみ購入時に材料受入価格差異を把握する修正パーシャル・プラン」とあり，仕掛品勘定に「直接労務費差異」「製造間接費差異」が記入されているため，直接労務費と製造間接費は実際発生額を記入すると判断する。

10-シリアル・7077

仕 掛 品	
前 月 繰 越 (ア：*1) 5,750,000円)	製 品 (ウ：*4) 72,800,000円)
直 接 材 料 費 (イ：*3) 12,480,000円)	異 常 仕 損 費 (エ：*5) 1,200,000円)
直 接 労 務 費 (36,764,000円)	材料消費数量差異 (オ：*6) 480,000円) ← 数量面のみ
製 造 間 接 費 (38,060,400円)	直 接 労 務 費 差 異 (カ：*7) 2,114,000円)
	製 造 間 接 費 差 異 (7,260,400円)
	次 月 繰 越 (9,200,000円)
(93,054,400円)	(93,054,400円)

*1) @標準直材費3,000円×月初500個+@標準加工費*2) 17,000円×月初加工量250個

*2) @標準直労費9,000円+@標準製間費8,000円

*3) 標準価格600円×材料実際消費量20,800kg

*4) 正味標準原価20,000円×(1+正常仕損率4%)×完成品3,500個

*5) 正味標準原価20,000円×異損60個

*6) 不利差異が正の値となるように算式を示す（以下同様）。

標準価格600円×{実際20,800kg－標準(@標準消費量5kg×当月4,000個)}

*7) 実際直労費36,764,000円－標準(@標準直労費9,000円×当月3,850個)

→ p184の面積図で意味を十分理解すること!

修正パーシャル・プランであるため，SPX AQとなる。

問題 8

正解

5

難易度

A

【出題内容】

理論 (正誤) 標準原価計算

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

ア. 誤 り。 標準原価計算制度において用いられる標準原価は、現実的標準原価又は正常原価である。 (基準4(1)2) *P168*

イ. 正しい。 (基準4(1)2) *P169*

ウ. 誤 り。 各部門別の固定予算は、一定の限度内において… (中略) …となる。変動予算とは、製造間接費予算を… (中略) …にする。 (基準41(3)) *→ P55①②*

エ. 正しい。 (基準43) *P166脚注1*

標準製品原価表 ⇒ 標準原価カードのこと。

問題 7

正解

1

難易度

A

【出題内容】

計算 標準原価計算（直接材料費の歩留配合分析）

P186

【解説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

1. 原料P消費価格差異、原料Q配合差異、原料R歩留差異の計算

A P	消費価格差異 P : *4) (-) 104, 000円		
P 640円			
Q 850円			
R 400円			
S P	歩 歩留差異 R : *6) (+) 27, 000円	配合差異 Q : *5) (+) 40, 500円 合	
P 630円			
Q 810円			
R 450円			
S Q		S' Q	A Q
P *2) 10, 020kg	*3) 9, 900kg	10, 400kg	
Q 1, 670kg	1, 650kg	1, 600kg	
R 5, 010kg	4, 950kg	4, 500kg	
合計 *1) 16, 700kg	16, 500kg	16, 500kg	

- *1) 完成品15,030kg×標準消費量10kg/標準生産量9kg
 *2) S Q合計16,700kg×原料P標準配合率6kg/10kg
 *3) S' Q合計16,500kg×原料P標準配合率6kg/10kg
 *4) (S P 630円 - A P 640円) × A Q 10,400kg
 *5) S P 810円 × (S' Q 1,650kg - A Q 1,600kg)
 *6) S P 450円 × (S Q 5,010kg - S' Q 4,950kg)

この矢印の向きが超重要!!
 「予算統制」でも同様の話がある (P284 脚注2)

2. 合計

P消費価格差異(-)104,000円 + Q配合差異(+)40,500円 + R歩留差異(+)27,000円

= (-) 36,500円

実際BOX	
実投入 16,500 kg	② 15,030 kg
実減 1,470 kg	

標準BOX	
標投入 右記計 *1) 16,700 kg	② 15,030 kg
標減 1,670 kg	× $\frac{1kg}{9kg}$

問題 7

正解

1

難易度

B

【出題内容】

計算 標準原価計算（仕損・減損の発生と標準原価計算）

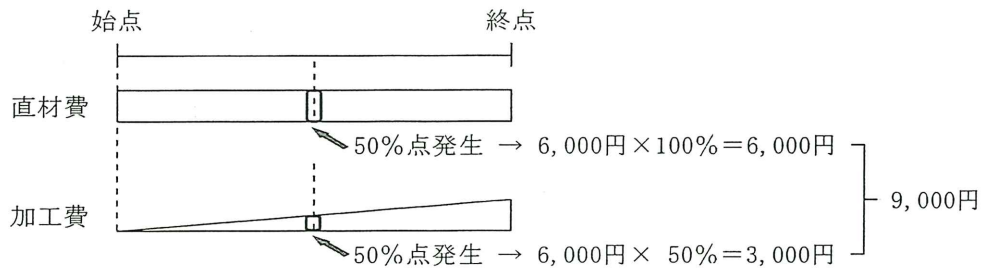
【解説】

正常仕損が途中点で発生する点に注意し、何とか正答して欲しかった。

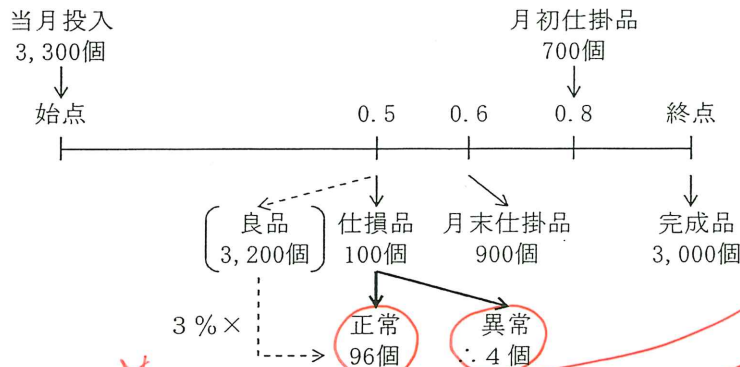
1. 標準原価カード ← まず、こゝをしっかりと作る。

直接材料費	@2,000円 × 3 kg	6,000円
加工費	@1,500円 × 4 時間	6,000
製品 1 個当たりの正味標準原価		12,000円
正常仕損費	* 9,000円 × 3 %	270
製品 1 個当たりの標準原価		12,270円

* 原価標準に含める正常仕損費



2. 正常仕損量および異常仕損量の把握



良品：完成品3,000個－月初仕掛品700個＋月末仕掛品900個＝3,200個
または、
当月投入3,300個－仕損品100個＝3,200個

3. 完成品標準原価

標準原価@12,270円 × 完成品3,000個＝36,810,000円

4. 異常仕損費

直接材料費@6,000円 × 異損 4 個 + 加工費@6,000円 × 異損加工量 2 個＝36,000円

6,000円 × 4 個 + 3,000円 × 4 個

@1,500円 × 2 時間

50%点で加工をやるから。

問題 8

正解

3

難易度

B

【出題内容】

理論 (正誤) 標準原価計算

【解 説】

判断に悩む記述もあるが、何とか正答して欲しかった。

- ア. 正 (基準2) *P4*
- イ. 誤 標準消費量は、通常生ずると認められる程度の減損、仕損等の消費余裕を含む。
(基準41(1)2) *P168.201* *← 基準操業度のこと*
- ウ. 誤 標準間接費配賦率は固定予算算定の基礎となる操業度ならびにこの操業度における標準間接費を基礎として算定する。(基準41(4)) *P170脚注5*
- エ. 正 (基準42) *P170脚注1*

以上より、正しい記述は、ア、エであり、正解は3となる。

問題 7

正解

5

難易度

B

【出題内容】

理論（正誤） 標準原価計算

【解 説】

一部細かい記述もあるが、何とか正答して欲しかった。

ア. 誤

標準原価計算制度における、数量差異、作業時間差異、能率差異等の原価差異は、異常な状態に基づくものと認められるものについては、これを非原価項目として処理する。 P182

(基準47(2)1)

イ. 正

(基準47(1)1, 2) P182

ウ. 誤

予定価格等が不適当なため、比較的多額の原価差異が生ずる場合、直接材料費、直接労務費、直接経費および製造間接費に関する原価差異の処理は、個別原価計算の場合は、当年度の売上原価と期末におけるたな卸資産に指図書別に配賦する方法と、当年度の売上原価と期末におけるたな卸資産に科目別に配賦する方法が示されている。(基準47(1)3①) P182

エ. 正

(基準47(1)3②) P182

以上より、正しい記述はイ、エであり、正解は5となる。

問題 8

正解

3

難易度

A

【出題内容】

計算 標準原価計算 (原価標準に仕損許容額を含めない方法)

P221

⇒ 非常に厳しい標準

【解説】

仕損差異を仕損品の標準原価として求め、確実に正答して欲しかった。

1. 仕損が発生しなかった場合の標準原価差異 (ア)

原価標準4,400円×実際生産高1,100個－実際発生額合計5,323,000円＝－483,000円(不利差異)

2. 仕損差異 (イ)

原価標準4,400円×仕損品50個＝220,000円(不利差異)

問題 7

正解

3

難易度

A

【出題内容】

理論 (正誤) 標準原価計算

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

ア. 正

(基準4(1)2)

p9, 168

イ. 誤

正常原価は、経済状態の安定している場合に、たな卸資産価額の算定および原価管理のために用いられる。(基準4(1)2)

p168

ウ. 誤

標準時間は、通常生ずると認められる程度の疲労、身体的必要、手待等の時間的余裕を含む。

(基準41(2)1, 2)

p168, 201

エ. 正

(基準41(3)2①)

p58

以上より、正しい記述は、ア、エであり、正解は3となる。

予算編成は翌1年間の話(p281)。← 短期利益計画の一端。
そのため、正常原価(長期平均的な原価水準)は、すぐわないと、
原価計算基準は考えている。